断章９　食卓③

川鍋　さく

翌日、昼前になっても仕事発生の連絡が無かったので、母は夕方、近所の整形外科に行った。わたしは「母が病院に行っている間にスーパーで買い物をしてるから」と言って、出掛ける母に付いていった。この期に及んで母が病院に行くのを躊躇うのでは、と思ったわけではない。ただ、めったに病院に行くことのない母だから、近所の小さなクリニックに初めて行くのにも、心細さを感じているのではないかと心配だった。傍から見れば過保護な感覚なのは自分でもわかっていた。けれども、隣を歩く母の姿勢は普段よりも小さく丸まっているように見えて、その歩調も少しばかり力なく感じられた。整形外科クリニックの前に着き、中に入ろうとする母に、わたしは思わず「ひとりで大丈夫だよね？」と声を掛けた。「大丈夫だよ、子どもじゃないんだから！」と母は笑って言った。わたしは「終わったら電話して。」と念押しのように言い、小さく手を振ってスーパーに向かい歩き出した。数歩歩いて、後ろを振り返り、母が病院の中に入って行くのを改めて見届けた。きっと、母のことが心配ということ以上に、わたし自身の不安が大きいのだ。いつもの日常では見慣れない、元気のない母の様子。病院に行く母の姿。わたしの世界が大きく変わってしまうのかもしれないという予感を抱えながら、家でひとり、母の帰りを待って過ごすことができなかった。帰って来た母がどんな表情になっているのか、想像するのが怖かった。それで、たとえ空元気だとしてもいつもの調子で話そうとする母を、少しでも長く視界に入れておきたくて、わたしは一緒に家を出てきたのだと思う。

わたしがスーパーに入ってから四十分程して、母から「終わったからそっちに行くよ。」と電話があった。このスーパーは食料品売り場だけでなく衣料品売り場、雑貨店や書店などの専門店、ちょっとした飲食店も入っている中規模の総合スーパーで、テーブルとイスが並ぶフリーの休憩スペースもある。母とスーパーで待ち合わせをする時は、よくこの休憩スペースで合流しているので、今回もそこで待ってるよ母に伝えた。夕方の買い物ピークの時間で、休憩スペースも私の他に三組のお客さんが居た。食料品売り場で買ったであろう菓子パンを食べながらお喋りしている七十代くらいのおばあちゃん二人組。仕事終りに保育園の子どもさんを迎えに行ってその足で買い物に来た様子の、小さな男の子連れの若いお母さん。少し疲れた表情で男の子にジュースを飲ませながら、買い物の荷物を整理している。奥の席では中学生か高校生か、制服の男子二人がスマホを弄りながら「マクド行く？」と話している。きっとそこに在るのは、それぞれのいつもの日常。他人の日常でも、眺めていると少し心が落ち着い

た。

十分程すると母が到着した。母はさっき病院に向かっていた時と比べると少しだけ晴れた表情をしていた。すぐさま「どうだった？」と尋ねるわたしを安心させるように、明るい調子で「いやぁ、老化だってよ。いやだねぇ！」と口を開いた。母の話によると、背骨と背骨の間にある軟骨がすり減っているせいで背中や腰に痛みが生じていると、先生から言われたとのことだった。ちゃんとレントゲンも撮ってもらって、軟骨のすり減りがある部分が映し出されていた。「加齢によるものだって。老化現象だってさ。歳は取りたくないねぇ。」と笑いながら話す母に、私も緊張が解けたように思わず笑顔になった。内心、整形外科に行ってもそれらしき疾患が見つからずに、内科受診を勧められる流れになるのではないかと思っていた。きっと母もそれを予想していて不安になっていたと思う。けれどもこうして、整形外科で痛みの原因がはっきりとし、老化によるある意味自然な症状だと言われたことで、「万が一すごく重い病気とかだったら……」という最悪のケースではなかったと分かり、二人とも安心した。整形外科からはスティックタイプの塗る鎮痛剤が処方され、それで様子を見ながら2週間後にまた通院するようにと言われたとのこと。次回は骨密度を測る検査をしてもらうらしい。薬局に寄って処方された薬を受け取り、帰路に就いた。わたしも母も、行の道より会話が弾んだ。この日の夜は、久しぶりにふたりで一緒に晩ご飯を作った。わたしがなめこのみそ汁を、母が白菜と豚肉の蒸鍋と焼きナスを。特別なメニューではないけれど、大好きな日常のご馳走。ふたりして「うまっ！」「うまい！」と連呼しながら食べた。